

保育における雰囲気に対する保育者の意識

The Attitude of Preschool Teachers Toward the Atmosphere in Childcare

松浦美奈¹⁾・岩井真澄²⁾

MATSUURA, Mina・IWAI, Masumi

Abstract

The study aims to clarify the attitude of preschool teachers toward the atmosphere in childcare. First, it examines the atmosphere in childcare as required by nursery school guidelines, kindergarten education guidelines, and commentary books. Consequently, the results revealed that nurseries need to create a distinct atmosphere. In addition, the study discovered that atmosphere promotes the emotional stability of children and leads to their independence. Based on these results, four childcare professionals were interviewed to examine in depth the attitude of preschool teachers toward the atmosphere in childcare. SCAT analysis pinpointed three elements, namely (1) intentional atmosphere, (2) unintentional atmosphere, and (3) the meaning of creating an atmosphere by childcare workers.

Key word : 雰囲気 保育者の意識 人的環境 質的研究方法

1. 問題と目的

2018年より「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」が開催され、子どもの健やかな育ちを支える質の高い保育の機会の保障のため、保育の質の確保・向上に関する検討が始まった。保育の質の検討にあたっては、「子ども」を中心に考える事が最も基本と考えられており、保育において、生涯にわたる人格形成の基礎を培う、子どもの豊かで健やかな育ちを支え促す保育の機会を保障することは、大変重要なこととされている。このように、保育の質が問われ、保育者は様々な研修を重ね専門性を高めることが求められている現在、この保育の質を向上させる重要な役割を担っているのは、そこに関わる保育者ではないだろうか。保育は、環境を通して行なわれるものであり、そこに関わる保育者も環境の一部である。汐見(2018)は保育における物理的な環境の重要性を指摘しつつも、保育者のあり方が決定的な状況要因＝環境要素となることを述べており、このことから人的環境としての保育者のあり方を検討することは重要だと考える。

例えば、佐藤(2017)は、人的環境としての保育者のあり方として、子どもの精神的な部分にかかわる役割、子どもの成長や援助にかかわる役割、保育者の資質や姿勢にかかわる役割、保育者、保護者との連携にかかわる役割の4つを見出し、その中で保育者が最も大切だと考える役割は、子どもの精神的な部分にかかわる役割としている。これは、保育所保育指針(2017)における「養護」に示される「子どもの生命の保持および情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わり」と同様のことを示していると考えられ、子どもが安定した生活を送る事ができるように保育者の存在や関わりが安定的にある事が、子どものより良い育ちの根底といえる。しかし、このように保育者の人的環境としての重要性は示されていても、保育者がどのようにあるべきかという具体的なあり方までは示されていない。

筆者らは、人的環境としての保育者のあり方について検討する中で保育者の“雰囲気”に着目した。保育所保育指針や幼稚園教育要領やそれら解説書を概観すると、“雰囲気”という表現が多く使用されていることに気がつく。また、幼稚園教育要領(2017)では、環境とは物的環境だけではなく、その場の雰囲気なども幼児の主体的活動や体験の質に影響を与えると示されていることから、その必要性が示されているといえる。しかし、雰

1) こども教育宝仙大学 助教

2) 東京未来大学 特任講師

雰囲気に関する記述はあっても、その具体的な保育実践については触れられていない。また、先行研究においても、保育者の雰囲気に関心をあてた検討はほとんど見られないのが現状である。

このような要因として、保育現場における保育者のあり方は、関わる人や状況等により異なり多様であるため、一言で指し示すことは難しく、その上感覚的に捉える雰囲気については、その重要性は言及されていても、具体的な関わりとして検討されてこなかったことが考えられる。また、保育の場は子ども中心に行われるものであり、保育者の意識は子どもに向けられ、保育の計画や省察の際にも保育者自身のあり方に焦点があたらなかったことも要因ではないだろうか。例えば、差波(2018)は、保育者のユーモアを検討する中で、保育者の役割を果たす際に目に見えない関わりがあることをあげている。その一つに保育者が醸し出す雰囲気があり、「楽しい雰囲気」「楽しそうな雰囲気」を意図的に作り出していく保育者の関わりがあることを指摘している。このように、保育者の実践一つ一つに焦点を当てて検討することにより、雰囲気を捉えることは可能となると考える。そこで、本研究では人的環境である保育者のあり方の中でも保育実践における保育者の雰囲気に関心をあてて検討することとする。

前述したように、保育者の雰囲気に関する先行研究はあまり見られない。以上から、本研究では、はじめに①保育所保育指針・幼稚園教育要領とそれら解説書から、子どもとの関わりにおいて保育者に求められる雰囲気を見明らかにする。また、より実践的な保育者の雰囲気の検討を目的とし、②保育者の語りから、保育者の雰囲気に対する意識や雰囲気として捉える具体的な保育実践を検討する。

3. 方法

3-1. 保育所保育指針、幼稚園教育要領それら解説書に見る保育者の雰囲気の検討

はじめに、保育所保育指針、幼稚園教育要領、それら解説書(全て平成30年[2017]年改定。以下、保育のガイドライン)より保育者の雰囲気の検討を行う。保育のガイドラインは、それぞれの施設における保育の基本となる考え方や保育のねらい及び内容など保育の実践に関わる事項が記載されている。また、その解説書には、記載事項の解説や補足説明だけでなく、保育の留意点、取り組みの参考となる関連事項も記載されており、保育者のあり方や関わりを検討する上では、重要な記述であると考えこれらから検討を行うこととした。

3-1-1. 研究方法

保育のガイドラインより“雰囲気”について記載されている文章を抽出し、その後さらに、文章の記載内容から「保育実践において保育者に求められている雰囲気」を検討し分類を行う。【表1】また、それらの文脈から雰囲気を作り出すことを読み取り、(1)愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感を育むことをねらいとした保育者の雰囲気と、(2)子どもの主体的行動をねらいとした保育者の雰囲気の2つに分類した。【表2】

3-1-2. 結果と考察

【表1】に示されるように、保育のガイドラインには「～の雰囲気が必要である」「～な雰囲気をつくるのが大切である」等その記述は様々であるが、保育実践において保育者に求められる雰囲気に関する記載が多く見られた。また、求められる具体的な雰囲気として「楽しい」「和やか」だけではなく、「安心した」「受容的」「季節や折々の文化、行事」という保育の場特有と感ぜられる雰囲気もあることがわかった。

【表1】「保育実践において保育者に求められている雰囲気の記載数」

	記載数(本文)	記載数(解説)
保育所保育指針(本文、解説)	8	28
幼稚園教育要領(本文、解説)	1	16

雰囲気の種類では、幼稚園教育要領に比べ保育所保育指針(本文、解説)において雰囲気に関する記載が多いことから、3歳未満児の保育では、非言語を用いた関わりが多く大切にされていることが考えられる。また、全体を通して「健康」「言葉」に関わる部分において雰囲気の記載が多く見られた。以上から保育の中では食べる、話すといった子どもの心理的欲求を満たす場面において保育者の雰囲気を用いた働きが多く求められており、そのような場において子どもの情緒の安定を図ることや、主体性を育む雰囲気が求められていることが示唆された。

このような結果から、保育者の雰囲気は保育において重要な環境要素の一つであると考えられる。幼稚園教育要領解説(2017)には「幼児の活動への意欲や主体的な活動の展開はどのような環境においても自然に生じるというわけではない。まず、環境全体が緊張や不安を感じさせるような雰囲気では、活動意欲は抑制されてしまう」との記載がある。このことは、表2における(2)子どもの主体的行動をねらいとした保育者の雰囲気が多く記載されていることと、同のことを示しており、保育者が意図的に雰囲気を作り出す事の大切さを示していることと考

【表2】「保育者に求められる雰囲気」の目的

	分類と【記載数】	具体的な記載内容（一部抜粋）
保育所保育指針 （本文、解説）	(1) 愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感を育むことをねらいとしてつくりだす“雰囲気” 【13】	・保育士等に名前を呼んでもらったり、友達同士で名前を呼び合ったり、子どもにとって人と言葉を交わすことは楽しく嬉しい経験であることが大切である。こうした楽しさや嬉しさを味わうには、保育士等や友達との間に安心して話せるような 雰囲気 があることや、言葉を交わす相手への安心感と信頼感が必要である。（保育所保育指針解説、2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容、エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」）
	(2) 子どもの主体的行動をねらいとしてつくりだす“雰囲気” 【23】	・健康な心と体を育てるためには望ましい食習慣の形成が重要であることを踏まえ、ゆったりとした 雰囲気 の中で食べる喜びや楽しさを味わい、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。（保育所保育指針解説、第2章 保育の内容、2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容、（2）ねらい及び内容、ア 心身の健康に関する領域「健康」）
幼稚園教育要領 （本文、解説）	(1) 愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感を育むことをねらいとしてつくりだす“雰囲気” 【4】	・例えば、入園当初の不安や緊張が解けない時期には、幼児は、日頃家庭で親しんでいる遊具を使って遊ぼうとしたり、自分が安心できる居場所を求めたりする。教師に対しても一緒に行動することを求める姿が見られる。このような時期には、一人一人の家庭での生活経験を考慮し、幼児が安心して自分の好きな遊びに取り組めるように、物や場を整えることが必要である。また、教師はできるだけ一人一人との触れ合いをもつようにし、その幼児なりに教師や友達と一緒に過ごす楽しさを感じていけるように穏やかな楽しい 雰囲気 をつくるのが大切である。（幼稚園教育要領解説、第2章ねらい及び内容、第3節環境の構成と保育の展開、3 留意事項）
	(2) 子どもの主体的行動をねらいとしてつくりだす“雰囲気” 【13】	・言葉による伝え合いを幼児が楽しむようになるためには、教師や友達と気軽に言葉を交わすことができる 雰囲気 や関係の中で、伝えたいような体験をすることや、遊びを一緒に進めるために相手の気持ちや行動を理解したいなどの必要性を感じる事が大切である。（幼稚園教育要領解説、第1章総説、第2節幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、（9）言葉による伝え合い）

えられる。

今回は、保育所保育指針や幼稚園教育要領等の、あくまで大綱的基準として保育の目指す方針を示したものであり、具体的な実践からの検討ではない。また、今回の検討では、「表現」「人間関係」「環境」において、「保育者の雰囲気」の記載は見られなかった。しかし、例えば「表現」において、岡田（2008）が子どもの表現力の育ちに関して「子どもの表現力は、あたたかい安心できる雰囲気の中で、子ども自身が成功感、達成感を内に感じとることにより、はじめて自信が育つものである」と述べ、子どもに対して画一的な表現教育を行うことを否定し、「指導者のあたたかく許容的奨励的な態度」が、よい場の雰囲気をつくりあげるとしていることから、保育者の雰囲気は、保育の営み全体において重要な役割を担っていると言えるのではないだろうか。

3-2. 保育経験者へのインタビューをもとにした質的分析法を用いた検討

3-1では、保育者に雰囲気が求められていることが示されたが、実際に保育の場で保育者たちは雰囲気に対しどのような意識を持ち、どのような実践が行われている

のだろうか。そこで、保育者の雰囲気に対する意識や、雰囲気として捉える具体的な保育実践を検討することを目的とし、保育者へのインタビュー調査を実施した。

3-2-1. 調査

保育経験者4名を対象にインタビュー調査を実施した。今回は、保育経験からの語りを目的としているため、現職であるかは問わず、保育経験のある中堅者（経験年数5-10年）以上の保育者を対象とした。高濱（2000）は、経験者（経験年数11年以上）の知識は、中堅者（経験年数5～10年）と比べ、より構造化されているが、両者の知識量に差はないこと等述べており、本研究の調査対象者設定の参考とした。また、対象者の所属する種別は問わなかった。調査手順は次の通りである。①事前に口頭

【表3】「調査対象者」

	経験年数	所属施設
A 保育者	16年(うち非常勤2年)	幼稚園、保育所
B 保育者	17年	幼稚園、児童館
C 保育者	8年	幼稚園
D 保育者	14年(産休・育休2年6か月含む)	保育所

で調査の趣旨と調査倫理に対する留意事項の説明をした。具体的には、調査の撤回が可能であることや、個人情報取り扱いについて匿名化を行い個人の特定ができないように配慮すること、また得られた情報は、鍵のなかった場所に保管すること等を伝え書面にて同意を得た。②インタビューの冒頭にこれまでの就労先、保育経験年数の確認を行った。調査時期は、2019年7月～8月であった。

3-2-2. 方法

繰り返し述べているように先行研究があまり見られず、保育の場における雰囲気の詳細な定義が見られないことから、本研究では保育者の雰囲気に対する意識や捉え方を含め探索的に検討する。そのため、インタビューでは「保育実践における保育者の雰囲気として想起されること」について自由な語りを得た。インタビューはICレコーダーに録音をし、その後逐語録を作成し、SCATの手法を用いて分析を行った。SCATとは、大谷(2019)が開発をした質的データ分析手法であり、比較的小さいデータも分析が可能であることや、分析過程においてインタビュー対象者毎にストーリーラインを作成するという個別性が重視されている。具体的な手法として、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに〈1〉データの中の注目すべき語句〈2〉それを言いかえるためのテキスト外の語句〈3〉それを説明するようなテキスト外の概念〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4段階のコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。(大谷, 2019) また、大谷(2007)は質的データ分析手法としてのSCATの意義として、分析の過程が記述されることで、分析と理論化の過程を分析者が振り返り再検討することが容易になり、分析過程の「省察可能性 (reflectability)」を高めることが出来ることも指摘している。これらから、保育者の自由な語りから生成される保育者の雰囲気を捉え探索的に検討を行う本研究において、SCATの手法が適していると考え選択した。(SCATによる分析の一部を附録として文末に添付)

3-2-3. 分析結果

それぞれのインタビューにおけるストーリーラインを以下に示す。ストーリーライン中の下線部はSCATの分析から生成された〈4〉テーマ・構成概念である。本論では、それぞれを雰囲気がつくり出される要素(意識的な保育実践や保育者の意識等)、つくり出される雰囲気、雰囲気による影響、その他の4つの視点から捉え、下線

を変えることでそれぞれの構成概念をわかりやすく示した。

A 保育者のストーリーライン

A 保育者は、保育者の関わりの中では、保育者の統制的な保育実践や一方的な関わりが子どもへの強制的な緊張感となり子どもへのマイナスな雰囲気を生じさせることを挙げている。このような保育者の義務感による保育はこなす保育や強制的な保育者の関わりとなり理想の保育と実際の保育とのズレを生じさせる。また、保育の中では保育者の心的負担感を作り出す他者評価もあり、このような保育者の心的状態を作り出す要素は子どもへの保育者の緊迫感による影響となっている。一方、情緒の安定した保育者の存在が、子どもにとって安心できる存在となり子どもの自由な表現の保障となっている。このような保育者の心的状態による影響から、A 保育者は時間的余裕の必要性を感じており、それは、落ち着いた雰囲気の根底だと考えている。以上からA 保育者は保育者の影響として、子どもの主体性を尊重する保育者の思いが保育者の雰囲気創造の可能性につながるとし、実践知による意識化の中で、子どもに対し保育者の意図の反映がなされている。

一方で、雰囲気とは受け手の価値観が反映されるため、保育者が多様性の自覚を持ち子どもの選択・自己決定の尊重が必要だとA 保育者は感じている。

B 保育者のストーリーライン

B 保育者は、子どもとの間で生じる雰囲気の構成要素として、子どもとの信頼関係や、同僚性の中でも特に阿吽の呼吸で理解しあえることを挙げている。良好な同僚性や対話のある関係性での保育は、子どもの最善の環境となる。このような対話可能な環境や雰囲気では、保育者間の連携が図れ、保育者にとっての安心感のある自然発生的な雰囲気が作られていく。

雰囲気を思い浮かべる場面として、子ども主体的な保育と保育者主導的な保育の場面があり、前者では子どもの意思決定による保育の展開がなされ、保育者の判断力により、保育者の的確な関わりが行なわれる。また、これらは、保育の積み重ねの中で保育者が保育過程における子どもの評価から課題の明確化と実践の連続性の中で見出される細かな視点や配慮の上で行われる実践であり、それが子どもの間で生じる雰囲気につながる。一方、後者では、保育者の想定とは異なる子どもの姿が見られることもあ

り、B保育者は集団保育の難しさの認識をしている。そのような場面では、保育者の意図的な表現や、場面に合わせた雰囲気の演出を実践している。これらの実践では、保育者と子どもとの人間関係の構築が必要であり、信頼関係にある子どもが保育者への認識を深めることで可能になる。さらに、B保育者は、保育者間の関係性の不和や子どもの自己表現の畏縮を感じる際に、ポジティブな気分を生み出す話題の提供などを通して自己表現を可能とする雰囲気を作り出している。また、子どもとの個別の関わりへの意識を持ち、優先的な時間の確保をする中で、子どもとの対峙を心がけたり、気軽な雰囲気を意識して作ったりしている。B保育者は経験の中で重ねた実践知を深めることで、雰囲気の自己調整をするようになっていった。

C保育者のストーリーライン

C保育者は、子ども主体の保育の実現を目指し、場面に合わせた語りや緩急のある保育を意識している。例えば子どもと立場を共有する場面や、子どもと異なる立場での場面などでは、それぞれ保育の場面に合わせた意図的な関わりをしている。その中でも子どものネガティブな場面においては、母性的な包容力を想起させるような、真剣な姿勢の表現をすることで、親密性の強化による心のケアをおこなっている。

また、楽しさの共有の場面では、全力投球で関わり保育者の自己表出をしている。言い換えればこれは保育者の特性からくる関わりであり、無意識的でもある。このように、保育の中でも保育者の意図による保育者の援助の差異がある。具体的には、場面に合わせて調整された語りによる子どもの主体的行動の促しや、雰囲気の変化による子どもの気づきの促しのように、子どもの発達を考慮した援助を行っている。

D保育者のストーリーライン

D保育者は、子どもを理解しようという思いを大切にしている。子どもとの関わりの中で、意識的な言語化により子どもの思いを代弁し、子どもの理解者となるとともに、認知的共感を行なうことで、感情の共有をしている。

また、具体的な関わりとして距離感を縮めた語りかけを行なっている。D保育者は、保育の中での雰囲気の重要度の高さを認識し、保育者の雰囲気とし

て浮かぶのが温かさであるとしている。

D保育者は、子どもの自己選択の尊重を大切にしている。状況に応じた保育者の言動を際立たせる実践や意図的な声量の調整など保育者の誘導的な関わりを実践することで、子どもの主体的な気づきの促しをおこなっている。その際には言葉以外の保育者の表現を用いることもある。

3-2-4. 考察

本来 SCAT による複数のデータを扱う分析では、個別に作成されたストーリーラインを、さらに SCAT で分析することによりメタ的な分析を行うことができる(大谷, 2019)としている。しかし、本研究の目的は、保育者の雰囲気に対する意識や、雰囲気として捉える具体的な保育実践を検討するものであり、結果として一つの答えを求めめるのではなく様々な保育者の語りから得られる概念を生かし検討を行うことを考えた。そこで、同様の分析手順を行っている高木、片野(2014)を参考に、個々のストーリーラインから理論的記述を生成するのではなく、俯瞰し各要素に分類したものを図式化し理論を記述することとした。その結果、①意図的な雰囲気、②非意図的な雰囲気、③保育者が雰囲気を作り出すことの意味の3つの要素に分類された。

以下、4名の語りを例に挙げながら各要素についての理論を記述する。

①意図的な雰囲気

①-1 場面に合わせた雰囲気

保育者は意図的に雰囲気を作り出し、子どもに接している。保育者が場面に合わせて雰囲気を作り出していることは、全ての保育者が語っており、子ども主体的な保育場面と保育者主導的な保育場面の両面において、それぞれ意図を持った雰囲気を作り出していることが明らかとなった。子ども主体的な保育場面における語りでは、D保育者が、「保育の中で、雰囲気、どういう場面かなあ。子どもたちが自由に遊んでたりとか、食事をしていたりとかいう場面かな。」と振り返った後、その雰囲気を「温かい」と表現している。D保育者が、主体的な子どもの姿を温かい雰囲気を持って見守っていることがわかる。一方、保育者主導的な保育場面における語りでは、C保育者は「製作とか一斉活動してる時の話し方、敬語もそうですけど抑揚も気を付けてるんだと思います。」と語っており、活動のけじめを意識し、子どもが聞く態度を身に着けられるよう、少し改まった落ち着いた雰囲気を作り出していることがわかる。また、同じ保育者主導的な保育場面でも、次のB保育者は異なる視点で語っ

①意図的な雰囲気	②非意図的な雰囲気
①-1 場面に合わせた雰囲気 ①-2 子どもの姿をもとに考慮された雰囲気 ①-3 自己表現を可能とする雰囲気 ①-4 実践知が生かされた雰囲気 ①-5 子どもの姿と保育者の思いとのズレ	②-1 保育者のポジティブな心的状況による雰囲気 ②-2 保育者のネガティブな心的状況による雰囲気
③保育者が雰囲気を作り出すことの意味 ③-1 保育のねらいの達成 ③-2 子どもと保育者の信頼関係の構築 ③-3 保育者間の信頼関係の構築	

【図1】4人の語りの分析の俯瞰図

ている。「発表会の練習っていうと、それがすごくわくわくする子もいれば、わくわくしない子もいると思うので、そういうことしたらすごい楽しいと思わない？ やってみたいよね？とかっていうような形で、すごい楽しいことだよっていうことを、私自身が楽しみなんだって気持ちを持って話すってというような雰囲気づくりとか。」この語りからは、保育者主導的な保育場面において、できる限り子どもが主体的に取り組めるように保育者が働きかけていることが読み取れる。このように、保育者は子ども主体的な保育場面と保育者主導的な保育場面において、場面に合わせて調整された語りを通して、緩急のある保育を行うことや、子どもの活動がよりよく展開していくような保育者の意図的な表現を実践したりすることで、場面に合わせた雰囲気作りをしていることがわかる。

①-2 子どもの姿をもとに考慮された雰囲気

意図的な雰囲気作りには、子どもの個別性を考慮したものもある。特に今回のインタビューでは、保育者が子どもとの個別の関わりにおいて考慮することとして、子どもとの向き合い方を例に挙げる語りが見られた。D保育者は「声を掛けたりとか話をするときには、遠くからじゃなくてその子の元に行って、その子と目を合わせて話すってことを心掛けてはいるかな。」と語り、子どもと視線を合わせ、物理的距離を縮めることで、心に寄り添う雰囲気を作り出していることがわかる。また、B保育者は、「厳しいというよりは、本気っていうか。大人の本気を伝えるっていうか、そういう意味で、(中略)本気を伝えるって意味での雰囲気づくりは結構、大事にしていたかもしれないです。」と子どもと正面から向き合うことを大切にしていたことを振り返っている。一方、別の場面を振り返って「(目を合わせた関わり

りについての問いに対して) そうじゃなくてもいい会話もあるかなっていう。何かやりながらとか、何か他のことやりながらでも、その子と一緒に個別の時間をつくるっていうことが目的なので」と語っている。これは、子どもに真正面から向き合うというよりも、一对一の時間を作ることを目的として、あえて気軽な雰囲気で関わることを意識していると考えられる。以上のことから、保育者は、個別の関わりへの意識により優先的な時間の確保をすることで、子どもとの対峙を意識的に行ったり、あえて気軽な雰囲気で関わったりすることが明らかとなった。すなわち保育者は、一人一人の状況を見極め、子どもの姿をもとに考慮された雰囲気を作り出しているといえる。

①-3 自己表現を可能とする雰囲気

保育者は、人権擁護の観点からも、子どもが自己表現できることを願い、保育の中で様々な関わりをする。自己表現ができるということは、自分の意思を素直に表すことができる環境が保障されているということである。A保育者は「時間的余裕があると、(中略)のびのびゆったりした雰囲気になるのかな。」と語り、時間のゆとりが、落ち着いた雰囲気の根底となることを語っている。「のびのび」という語に子どもの心的開放感が表れており、保育者が時間的余裕を持つことで、子どもの自己表現可能な雰囲気が作られていることがわかる。D保育者は、「心掛けていることは、なるべく禁止用語を使わないようにしているかな。『何々しないで』じゃなくって、『これじゃなくてこっちで遊ぶ?』とか『これはちょっと危ないからこっちにしてみる?』とか、『それ危ないからやらないで』じゃなくって、『こっちにしてみたらどうか』とか。」と語る。このような肯定的な言葉をあえて選択し関わることにより、子どもの自己選択の尊

重を意識した雰囲気作りをしていることがわかる。以上から、自己表現可能な雰囲気とは、時間的余裕などの条件が保育者の心的状態を作り出す要素となって間接的に影響することで作り出されることや、保育者の言語を用いた関わりなどが直接影響をして作り出されることが示された。

①-4 実践知が生かされた雰囲気

得られた語りの中で、全ての保育者が保育の中で雰囲気を作り出すことの意義を感じていた。そのような感覚はどのように身に着けたのだろうか。A 保育者は、「(子どもにより関わり方を変化させることについて) 意図的だと思いますけど、最初はわからなくて、何年か経験してから。」と語り、B 保育者も、「経験から、タイミングってというのは分かってくと思うから、(中略) だんだん経験によって(自分の意図しない雰囲気を出してしまうことは) なくなってくるのかなとは思いますが。」と語っている。どちらも、経験によって感覚を身に付け、意図的に雰囲気を作り出す必要性を自覚したり、雰囲気の自己調整ができるようになったりしていったことを表している。つまり、経験の中で重ねた実践知が保育者の雰囲気づくりに対する認識を深めていったといえる。

①-5 理想の保育と実際の保育とのズレ

保育者が意図的に雰囲気を作り出すことによる葛藤を A 保育者が語っている。「笛や号令とかで子どもを動かすみたいなの、ゆったりした雰囲気を作れない理由は、活動が多いとかこなさなきゃいけないことが時間割みたいに多いから、キビキビ動かせないと、子どもたちをしつけないとやるべきことが回らないからそうさせてるっていうのもあるかな。」と、限られた時間の中で活動をこなしていくために緊迫した雰囲気を作る必要性があったことを振り返っている。後の語りで、「時間的余裕があると、のびのびしたっていう雰囲気があれば、そういうのが可能になる。」と、本来はのびのびした雰囲気を作りたいのに、園のカリキュラムなどから時間的な余裕がなく、理想の保育が実現できないことに葛藤していたことがわかる。

保育者の義務感による保育は、強制的な保育者の関わりを生むことがある。このことは意図的でありながらも理想の保育と実際の保育とのズレを生じさせ、子どもに負担感を持たせると同時に、保育者の負担感ともなり得ると考えられる。

② 非意図的な雰囲気

②-1 保育者のポジティブな心的状況による雰囲気

保育の中では、保育者が意図せずとも生まれる雰囲気

がある。そのことがわかるのが、次の C 保育者の語りである。「意図的ではないわけじゃないけれど、一緒に遊んで、例えば、ドロケイしてるとか、おにごっこしてるってなると、一緒に楽しんでるから、自然とそういう雰囲気になりやすい。」「自然とそうなるのかなとは思いますが。ただ、私だからか分かんないですけど、そうやって駆け回ってる時は、自然にそういうふうになるけど、おままごととか、静かに遊んだりとか、発展していきなきゃいけない遊びってなると、(中略) 意図的に言うこととか、雰囲気はつくるかもしれないです。」C 保育者は、子どもとともに活発に遊ぶ、楽しさの共有の場面での自分自身を振り返り、非意図的に感情を表出し関わることについて「私だからか分かんないですけど」と語っている。これは性格やこれまでの経験などからくる保育者の特性が、子どもへの関わり方に表れている場面と考えられ、無意識的な保育者の自己表出がその場の雰囲気を作り出していると考えられる。また、このように保育者がどの場面で自分自身の雰囲気づくりの意識化をするのかについては、保育者の特性により違いが生じるのではないだろうか。C 保育者が、意図的に雰囲気を作っているわけではないが、子どもとともに楽しむ雰囲気を自然な形で作っているように、保育者自身の心的状況が表出され、それが雰囲気に影響することがわかる。

②-2 保育者のネガティブな心的状況による雰囲気

上記に反し、保育者のネガティブな心的状況が非意図的に雰囲気に影響する場合もある。A 保育者は、「上からの評価の目があるから、ギスギスした雰囲気が作り出されると思います。」と語り、自身が意図しない雰囲気が保育の中にあつたことを振り返っている。保育者の心的負担感を作り出す他者評価が、保育者の緊迫感による影響を受けた雰囲気となった事例である。このように、保育者のネガティブな心的状況は、非意図的な雰囲気として保育の中に表出される可能性があり、それが保育者のジレンマとなることも考えられる。

③ 保育者が雰囲気を作り出すことの意味

③-1 保育のねらいの達成

保育者の語りから、保育者は、雰囲気を作り出すことで子どもが自ら気づき主体的に生活出来るようになることを期待しているということがわかった。言い換えれば、雰囲気を作り出すことは発達に応じた保育のねらいを達成するための保育方法のひとつとして捉えられているといえるのではないだろうか。例えば、A 保育者の「子どもを意欲的に、主体的にしたいっていう願いがあれば、その雰囲気は作れるかなって思いました。」や、D 保育者の「させるんじゃなくて気付いてやってもらえるよう

な雰囲気はつくってるかな。」という語りのように、全ての保育者が雰囲気を作り出すことによって子どもの意思決定や、子どもの主体的行動の促しを図っていることがわかる。このことから、雰囲気を作り出すことは、子どもが主体的に環境に関わるようになるための、保育方法のひとつであると考えられる。

③-2 子どもと保育者の信頼関係の構築

雰囲気を作り出すことは、子どもと保育者の信頼関係の構築の上でも、重要な位置づけであるといえる。B保育者は「保育をする中で、例えば、先生同士の関係とかがうまくないとか、あとは、子どもが畏縮してるなどか、そういったときに、(中略)そこを和ますような冗談を言ってみたりとか、どちらかっていうとこうでなければいけないというふうに、子どもとか先生とかも思っているときに、わざと、必ずしもそうもいかないよねってというような話を出してみたりして、なるべく、やわらかい雰囲気を持ってくような意識は結構ありましたね。」と語っている。B保育者は、子どもの自己表現の畏縮を感じたときに、ポジティブな気分を生み出す話題の提供などを通して、やわらかい雰囲気を作り出していたことがわかる。またC保育者は「けがしたときの先生の雰囲気より優しそうな雰囲気。お母さんみたいな。」と語っており、これは子どもの不安を取り除けるような心のケアを意識した雰囲気作りといえる。このような親密性の強化より生まれる自己表現を可能とする雰囲気や母性的な包容力をもった雰囲気は、保育者と子どもの間に繋がり、保育者と子どもの信頼関係の構築に寄与しているといえる。

③-3 保育者間の信頼関係の構築

雰囲気を作り出すことは、保育者と子どもの関係性だけでなく、保育者間の関わりにも影響しているといえる。B保育者は、「例えば、子どもが成長したとか子どもが変化したとか、子どもが泣いているとか、そういう場を共有する中で、その子についての、その先生なりの解釈というか、そういうのを、保育中でもフランクに話し合えるような雰囲気があると、非常に子どもにとってもいい環境を作ってると思うし、自分一人で抱えているっていう感じもしないので、園全体で子どもを見ていけるっていうような雰囲気が生まれるので。」「普段の保育の場面でも、保育者同士も、必要な会話はしていくっていうような雰囲気があると、非常に安心感があるというか、安心感のある雰囲気が生まれるんじゃないかと思います。」と語り、対話可能な環境や雰囲気があることで、保育者間の連携や、保育者にとっての安心感にも繋がり保育者間の信頼関係の構築にも影響していることをB

保育者は実感している。また、B保育者が言うように、気軽に話し合えるような雰囲気を意図的に作ることで、やがて自然発生的な雰囲気として園全体で子どもを見ていけるような雰囲気を「生む」と考えられる。意図的な雰囲気づくりは、さらに新たな良い雰囲気を生み出し、好循環をもたらすといえる。

これまで示してきたように、①意図的な雰囲気も、②非意図的な雰囲気も、それぞれに③保育者が考える雰囲気を作り出すことの意味があり、保育者は保育実践の中で自らの雰囲気を強く意識しなくとも、③-1保育のねらいの達成に向け試行錯誤しながら保育を行う中で実践されていることがわかった。しかし、①-5に示される、保育者の理想と実際の保育とのズレや保育者感の関係性において保育者の作り出す雰囲気に対し、ネガティブな影響を与える要素があるとしたら、保育者は意識的にその問題点に向き合い改善を心がけることが必要ではないだろうか。

4. 全体的な考察

本研究において、自然と醸しだされる雰囲気だけではなく、保育者が作り出す雰囲気や、そこに至るまでの保育者の実践や思いに焦点をあて分析することで、保育実践における保育者の雰囲気が、保育者の心的状況や保育場面により影響を受けることや、保育者が作り出す雰囲気には保育者のねらいがあることが示された。このような結果から、保育者の雰囲気を保育者自身が意識することの重要性が示されたといえるのではないだろうか。子ども達の自発性が良く発揮されるためには、身近に良いモデルとしての内的作業モデルの役割を果たしてくれる保育者の、模倣したくなるような保育行為がふんだんにあることが、重要(小藺江, 2016)だとされているように、保育者は保育のねらいの達成を目的とした関わりだけではなく、常に子どものモデルとしての自分自身の表出や表現を意識する必要があるといえるだろう。

本研究では、保育者の語りから得られた構成概念において「保育者の特性」による影響があることが見出された。幼稚園教育要領解説におけるチーム保育の記述においても、教師がそれぞれの持ち味を生かしながら保育を行っていくことが大切であると示されているように、保育者の特性によって保育の作り出す雰囲気が異なることは尊重されるべきである。ただし、1.問題と目的において、人的環境としての保育者の重要性を述べたように、子どもにとって保育者から受ける影響は大きく、関わる保育者により子どもの生活する雰囲気が極端に異なったり偏りがあったりすることは、子どもの発達に

にとって良いとは言い難い。

現在、厚生労働省より試案として出されている保育所における自己評価ガイドラインでは、保育士等における保育内容等の自己評価において、保育者が子どもの理解にあたり意識したいことが明記されている。その関係の中での理解として、「(保育者が)自分自身が子どもにとってどのような存在であるかということに目を向けることも重要」であることや、「子どもとの関係性という視点から、保育士等が「自分はどのような思いや願いをもって子どもにかかわっているか」「保育を振り返ってみて、自分の関わり方や保育の状況は子どもにとってどのように感じられているか」ということについて意識することが重要であることが示されている。このように保育者の実践は一方通行で行われるものでなく、日々の子どもの姿をもとにした計画、そして実践と省察の循環の中で行われるものであり、そのような振り返りの視点の一つに雰囲気を組み込むことは、子どもの情緒の安定や子どもの主体性を大切にする保育へとつながるのではないだろうか。また、そのような振り返りの中では、保育者の特性による雰囲気の違いについて、互いに補い合い連携し取り組むことが可能と考える。保育者自身が、保育者の雰囲気について知ること、保育実践の中で意識をすることが大切であり、子どもの姿だけでなく自分自身について振り返ることの重要性が示唆されたと考える。

5. 今後の課題

本研究により、保育における雰囲気に対する保育者の意識や保育者が雰囲気を意識した具体的な保育実践、また、保育者の作り出す雰囲気に与える影響が明らかになった。しかし、今回得られたデータは、経験年数の高い保育者の語りから得られた結果である。経験知による変化が見られたことから、今後は、経験年数毎に検討する必要があると考える。

また、今回は雰囲気に対する保育者の意識に焦点をあてたため、子どもが雰囲気をどのように捉えているかという視点に触れる事はしなかった。しかし、保育者の語りの中には「子ども同士の関係性の中で作られる雰囲気があること」や「子どもの好む雰囲気の高齢性について」の語りが見られた。この事は、保育者の雰囲気を考える際には、子どもの捉え方も同時に検討する必要があることを表しているといえる。実際に保育の中では、ゆったりした雰囲気を好む子どももいれば、情動が掻き立てられるような雰囲気を好む子どももいる。このような、子どもによる捉え方や感覚の違いについても保育者は意識する必要があるだろう。また、同時にそのような子どもの姿を評価する保育者の知識や技術を明らかにすること

も今後の課題と考える。

引用、参考文献

- 大谷尚 (2007). 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 第54巻2号, p40
- 大谷尚 (2019.) 質的研究の考え方-研究方法論から SCAT による分析まで-. 名古屋大学出版会, p271
- 岡田陽 (2008). 子どもの表現活動. 玉川出版部, p25, p93
- 小藪江幸子(2016). 「保育者の見守り行動」についての検討：生きる力の基礎を培う“見守り行動”を探る. 淑徳短期大学部研究紀要, 第55号, pp51-63
- 厚生労働省 (2017). 保育所保育指針解説. フレーベル館, p86
- 厚生労働省 (2019). 保育所における自己評価ガイドライン【改定版】(試案). 保育所等における保育の質・向上に関する検討会(第7回)資料3-2, p10, p12
- 厚生労働省 (2018). 中間的な論点の整理(保育所等における保育の質・向上に関する検討会)
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000360393.pdf>
2018年10月参照
- 佐藤有香 (2017). 人的環境としての保育者の役割-現職保育者の視点で-, こども教育宝仙大学紀要, 第8巻, pp57-64
- 差波直樹 (2018). 保育者と子どもとのかかわり-保育におけるユーモアの役割. 八戸学院大学短期大学部研究紀要, 第46巻, pp1-10
- 汐見稔幸 (2018) 発達154. ミネルヴァ書房, p7
- 高木裕子, 片野洋平 (2014). 教育プログラムを通じた実習生の SCAT 法によるストーリーライン図式とその文脈解釈に基づく示唆, 実践女子大学人間社会学部紀要, 第10集, pp35-53
- 高濱裕子 (2000). 保育者の熟達化プロセス:経験年数と事例に対する対応, 発達心理学研究, 第11巻3-200-211
- 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領解説. フレーベル館 p120, p248, p249

【附録】B 保育者の語りの分析

番号	発言者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の置いかえ	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題
1	(質問) MA	雰囲気と聞いたら、どういった場面を思い浮かべるか教えてくださいいただけますか。	子どもとの関わり 温かな雰囲気 保育者同士の連携 息が合っているか合っていないか	子どもとの関係性から生じる 良好な信頼関係 意思疎通の有無 関係性から生じる 意思疎通の有無	良好な信頼関係による影響 同僚間の関係性の問題 コミュニケーションの有無	子どもとの信頼関係 雰囲気構成要素 関係性 叫びの呼吸	
2	B	子どもとの関わりから生まれる温かな雰囲気とか、あとは先生同士の連携みたいな、先生たちの連携から生まれるつながりというかが合っているか合っていないか、そういう雰囲気。	自由な雰囲気 統制的な雰囲気	子どもが自己決定できる 子どもへの思いやりの雰囲気 保育者の強制的な雰囲気 一方的な関わり	子ども主体性を尊重する 保育者主導的な保育	子ども主体的な保育 保育者主導的な保育	
3	B	あとは、なんだろうな。自由な雰囲気とか周りと統制的な雰囲気とか。					
4	(質問) MA	先生同士の連携とはどのようなことですか。					
5	B	例えば、子どもが成長したとか子どもが変化したりとか、子どもが泣いているとか、そういう話を共有する中で、その子についての、その先生なりの解釈というか、そういうのを、保育中でブラブラに話し合えるような雰囲気があると、非常に子どもにとっていい環境を作っていると思うし、自分一人で抱えているという感じもしないので、園全体で子どもを見守っているという雰囲気も生まれるので。	フランク いい環境 一人で抱えている 園全体で子どもを見守っているという雰囲気 必要ない会話はいく 安心感のある雰囲気	保育者間の連携 保育者の良好な関係性 共有し合う 子どもが安心できる環境 自己負担の少なさ	同僚間の連携による影響 良好な信頼性とコミュニケーションの有無 子どもが生活する最善の場	過程環境における親の雰囲気 や、親の社会的性の視点	
6		普段の保育の場面でも、保育者同士も、必要な会話はしているというふうな雰囲気があると、非常に安心感があるというかが、安心感のある雰囲気が生まれるんじゃないかと思います。	必要ない会話はいく 安心感のある雰囲気	保育者間のやり取り コミュニケーションの多さ 必要ない時に会話ができる雰囲気 自然発生的な雰囲気	保育者間の連携が取れている コミュニケーションがとれる環境 対話を促す雰囲気 自然と作られていく雰囲気	雰囲気とはそもそも自然発生的に生じるものではないのか	
7	(質問) MA	自由な雰囲気とは具体的にどのようなことですか。					
8	B	やはり、子どもが、あんまりこう、保育者に頼り過ぎることなく、自分で選択したものを、子ども同士で展開しているような雰囲気。で、いざとなったら、それに対して先生が変更するというか、援助するっていうか、そういう場合は、子どもが自由に動けるような、主体的に動けるという自由な雰囲気なるのかなと。	自分で選択 子ども同士で展開しているような雰囲気 いざとなったら先生が変更する 自由な雰囲気	子どもが主体的な雰囲気 保育者は援助する 保育者の後方支援 保育者の適切な判断	子どもの選択による保育 保育者の適切な関わり 保育者の適切な判断	保育者の判断力と自由な保育との関係性 そこに雰囲気を作り出すカギがあると感じる	
9	(質問) MA	その自由な雰囲気が生まれるにあたって、保育者は、それは意図的のその雰囲気を作っていると思いませんか？					
10	B	積み重ね 子どもへの 課題 一つ一つを 子ども同士の間で作られている子ども同士の雰囲気だと思ってる。	日々の積み重ね 子どもへの委ね 課題の明確化 丁寧な保育 子ども同士の雰囲気	子どもの委ねを促すことでの重要性 課題の明確化と実践の繰り返し 保育サイクル 子ども同士の関係性の中で醸し出されるもの	保育過程における子どもの評価 課題の明確化と実践の連続性 子ども間での雰囲気 保育者の積み重ね	保育者の意識構成の重要性と子どもへの適切な評価により子ども間の雰囲気は作られる過程	
11	(質問) MA	四つ目におっしゃっていた統制的な雰囲気というのは？					
12	B	これは、ちょっと私の園では、割と活動が多かったり、やはり子どもにもよって活動についてこれなかったりして、活動を嫌がったりする子どももいたりで、活動が多いうつて面から、園としてやらなくてはいけないという思いもあって、先生主導で、必ず子どもが全員が主体的に関わっているとは言えないという姿も、なんとなく保育者の中で出てきてしまっているかなと。本当は、出てきてほしいかなという感じ。	積み重ね 子どもへの 課題 一つ一つを 子ども同士の雰囲気	子どもの委ねを促すことでの重要性 課題の明確化と実践の繰り返し 保育サイクル 子ども同士の関係性の中で醸し出されるもの	保育過程における子どもの評価 課題の明確化と実践の連続性 子ども間での雰囲気 保育者の積み重ね	保育者の意識構成の重要性と子どもへの適切な評価により子ども間の雰囲気は作られる過程	
13	(質問) MA	雰囲気を促さるために、意図的に作り出すようなことだったり、そういう場面ってというのはあると思いますか。	先主導 関わっているとは言えない	子どもの委ねを促すことでの重要性 課題の明確化と実践の繰り返し 保育サイクル 子ども同士の関係性の中で醸し出されるもの	活動に適切な子どもへの評価 課題の明確化と実践の連続性 子ども間での雰囲気 保育者の積み重ね	保育者の意識構成の重要性と子どもへの適切な評価により子ども間の雰囲気は作られる過程	

